

2024年9月29日（日）主日朝礼拝説教

『足を洗われる』 井上隆晶牧師

使徒言行録 26 章 3～18 節、ヨハネによる福音書 13 章 1～11 節

①【愛し抜かれるとは】

1 節に「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」とあります。これは受難週の木曜日の出来事です。「この世から父のもとへ移る御自分の時」というのは十字架の死のことです。明日には自分は十字架に架かって死に、父なる神のもとへ帰らなければなりません。弟子たちとこの地上で過ごす時間もあと残りわずかしかありません。そこで彼らを愛し抜かれたというのです。

「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」とはものすごい表現です。正教会のニコライ訳は「世にいる己に属する者を愛して、終りに至るまでこれを愛せり」、フランシスコ会訳は「この世にいる弟子たちを愛し、限りない愛をお示しになった」、口語訳は「世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された」、英語 (NIV) は「He now showed them the full extent of his love.」（キリストの愛の極みを見せられた）です。みな訳は少しづつ違いますが、愛の質（極限の愛）と、愛の時間（永遠の愛）を言ったものです。この両方でしょう。私はここを読んだ時に、どの時代であったとしてもキリストが肉体を持っておられたら、その時代のクリスチャンたちを同じように愛されるだろうなあと思いました。だから 2024 年の今日も、この都島教会という場所で、私たちを同じ愛で愛されるのです。ただ愛するだけではなく、愛し抜くのです。人間の愛は最初は良くても、やがて変わり、減少してしましますが、キリストの愛は人間のいかなる状況にも左右されず、何があってもその愛は変わらないのです。しかも純粹で深い極みの愛です。私は愛してもらえなかったといえる人は誰もいないのです。神の愛は天でも地でも変わらず、2000 年前も、今も変わらないのです。天に行かなくても地上で人は神の愛を体験できるのです。では具体的には何をされたのでしょうか。それは洗足という形で現れました。

「今や、人の子は栄光を受けた」（ヨハネ 13：31）と言って、イエス様は十字架を栄光と言われました。栄光とは何でしょう。光と栄です。隠れていた太陽が雲の合い間から姿を現すように、隠れていた神の姿が現れることを栄光と言います。十字架によって隠れていた神の愛が完全に現れたのです。なぜなら神の子を殺したのに、神は人を赦したからです。最高の物（神の命）を人間に与えたからです。それこそ愛の極みです。だからこそ十字架が栄光なのです。そのひな形が洗足です。「人の子は、仕えるためではなく仕えるために、また多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」（マルコ 10：45）

②【足を洗われる】

4～5節を見ると「食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。」とあります。イエス様は下着だけになり、腰にタオルを下げ、たらいに水をくんで弟子の足を洗い、タオルでふかれました。これは完全に僕の姿です。しかしどうして先生がこのようなことをするのかペトロには分かりません。そこで彼は「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか。…わたしの足など、決して洗わないでください」(6、8節)と足を洗われるのを辞退しようとしています。すると主は「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる。」(8節)と答えられました。焦ったペトロは「主よ、足だけでなく、手も頭も。」と言いますが、主は「既に体を洗った者は、全身清いので、足だけ洗えばよい。」(10節)と答えます。昔、公衆浴場で沐浴をして全身がきれいになった人は、家に帰る途中で足だけ汚れてしまいました。道は舗装されておらずサンダル履きだからです。同じように私たちがこの世を生きる限り(地に足がついている限り)罪を犯し、汚れてしまいます。それは避けられません。ではどうすれば私たちは清くなれるのでしょうか。「私の話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。私につながっていなさい。」(ヨハネ 15:3)と主は言われました。唯一聖なる方がキリストであり、その方の言葉を聞き、その方と一体になる(つながる)ことによって私たちは清められます。説教、洗礼、聖餐によって私たちは清くなるのです。洗礼はキリストと一体になる初めであり、聖餐は一体になることの更新です。結婚が一度であるのと同じように、洗礼もただ一度ですが、聖餐は継続です。ヨハネ福音書には聖餐の記事がなく、洗足がその代わりになっています。聖餐は汚れを洗う儀式なのです。「御子イエスの血によってあらゆる罪から清められる。」(一ヨハネ 1:7)からです。一週間ごとに聖餐によってあなたは足を洗われているのです。

③【愛されるままになることが救いである】

主は「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる。」(8節)と答えられました。面白いです。人間が神様(キリスト)と関係が回復するためには、神様(キリスト)に自分を洗ってもらうことだけだということです。いくら人間が自分を洗っても関係はできないと言うのです。この世の宗教は、神との関係を修復する為に人間が頑張って犠牲を捧げなければなりません。ノルマを達成し、人間が清くなったら関係が回復すると思っています。しかしキリスト教は真逆です。自分の汚れた足をそのままイエス様の手に乗せる、汚れた自分をそのままイエス様に委ねる、これだけで良いのです。神の愛を素直に信じることで、神様が自分にしてくれることを喜ぶ、それが救いだなんて何という単純さでしょう。子供のようにならなければ天国に入れないというのはそういうことです。子どもは愛される天才です。愛されるまま、されるがままです。

●難波幸矢さんというクリスチャンの方がおられます。夫さんは難波紘一といって高校の教師をしていたのですが、筋ジストロフィーという難病に侵されました。

亡くなるまでの10年間、年50～60回の講演をされました。発病当初、紘一さんは性格が変わってしまったそうです。「信じられないほどひねくれ、いじけ、懐疑心を持ち、想像できないほどの醜態を演じるようになったのだから、彼に対する落胆以外の何ものでもなかった。」妻の幸矢さんは離婚も一家心中も自死も考えるくらい苦しみました。それに加え娘の不登校、息子の大病という試練が続き、やがて「私の人生何もいいこと無いじゃあない。何よ神様！くそつたれ神様」とあらがうまでに心がすさんでいき、お酒を飲まないで眠れなくなります。そんな時出会ったのが「愛は情け深い」というコリント13章3節以下の言葉でした。「私がどれほど家族の為に一生懸命励み、思いやり、いじわるばあさんに耐え、ここまで頑張って、ここまでしてきた！と、褒められこそすれ批判されないようにやってきたが、愛がなかった。『愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない』という言葉が身にしみた。すべてを信じてないし、すべてに耐えてない。自分のことばかり。…へたへたと座り込むほどに分かった。罪人であるとおお分かりすることが人生にとってどんなに大事な事か。主体が『私』から『神』に変わる。『生きる』から『生かされている』に変わる。こんな者が赦されてあると感じたらワクワクと喜びが溢れ出て、この神をお伝えしないではおられない者に変えられた。私の頭の上には燦燦と神の愛が降り注いでいる。草原を歩むようなさわやかさだ。」夫さんが醜態をさらしてくれたお蔭で、夫を憎み、自分の愛のなさ、罪深さを知ったというのです。すべてが神様の計画だったといっています。最後にこんな言葉も残しています。「一つ一つの試練という点をつなぎ合わせると平安に至る。試練は平安までがセットだと思っている。」

幸矢さんは、主体が「私から神」に変わりました。「私がしたこと～、私が、私が～」が消え、神が自分にして下さっていることが見えたのです。その時、彼女は変わってしまいました。

●先週、聖餐の後、神はなぜこの世界と人間を愛されるのだろうと不思議に思いました。その目は人の罪を見るにはあまりにも清く、その耳は人の汚れた言葉を聞くのには、あまりにも清いのです。それでもこの方はこの世界にとどまられ、人間と関わられます。そこにこそ救いがあると思いました。人間の愛など当てになりません。気分です。神の愛こそ、最も確かです。この方の愛がこの世界を支えているのだと分かった時、心が温かくなりました。

「愛がなかった。」という難波幸矢さんの言葉は重いです。自分の上に燦燦と降り注ぐ神の愛に気がつく私たちでありたいと思います。